

# 星

国木田独歩

青空文庫



都に程近き田舎に年わかき詩人住みけり。家は小高き丘の麓にありて、その庭は家にふさわしからず広く清き流れ丘の木立ちより走り出でてこれを貫き過ぐ。木々は野生えのまに育ち、春は梅桜乱れ咲き、夏は緑陰深く繁りて小川の水も暗く、秋は紅葉の錦みごとなり。秋やや老いて風鳴りそむれば物さびしき限りなく、冬に入りては木の葉落ち尽くして庭の面のみ見すかさるる、中にも松杉の類のみは緑に誇る。詩人は朝夕にこの庭を楽しみて暮らしき。

ある年の冬の初め、この庭の主人は一人の老僕と、朝な朝な箒執りて落ち葉はき集め、これを流れ岸の七個所に積み、積みたるままに二十日あまり経ちぬ。霜白く置きそむれば、小川の水の凍るも遠からじと見えたり。かくて日曜日の夕暮れ、詩人外より帰り来たりて、しばしが間庭の中をあなたこなたと歩み、清き声にて歌うは楽しき恋の歌ならめ。この詩人の身うちには年わかき血温かく環りて、冬の夜寒も物の数ならず、何事も楽しくかつ悲しく、悲しくかつ楽し、自ら詩作り、自ら歌い、自ら泣きて楽しめり。

この夕は空高く晴れて星の光もひときわ鮮やかなればにや、夜に入りてもややしばらくは流れの滯を逍遙してありしが、ついに老僕をよびて落ち葉つみたる一つへ火を移さ

しめておのれは内に入りぬ。かくて人々深き眠りに入り夜ふけぬれど、この火のみはよく燃えつ、炎は小川の水にうつり、煙はますぐに立ちのぼりて、杉の叢立つあたりむらだに青煙せいえんいちまつ  
一 抹、霧のごとくに重し。

夜はいよいよふけ、大空と地と次第に相近づけり。星一つ一つ梢こずえに下り、梢の露一つ一つ空に帰らんとす。万籟ばんらいせき寂として声なく、ただ詩人が庭の煙のみいよいよ高くのぼれり。天に年わかき男星おほしめほし女星おほしめほしありて、相隔つる遠けれど恋路こいじは千里も一里とて、このふたりいつしか深き愛の夢に入り、夜々の楽しき時を地に下りて享うけ、あるいは高峰たかみねの岩角かどに、あるいは大海原おおうなばらの波の上に、あるいは細溪川ほそたにかわの流れの濤ほとりに、つきぬ睦語むつごとかたり明かし、東雲しののめの空に驚きては天に帰りぬ。

女星めほしは早くも詩人が庭より立ち上る煙を見つけ、今宵こよいはこのほか寒く、天の河かわにも霜降りたれば、かの煙たつ庭おに下りて、たき火かきたてて語りてんというに、男星ほほえみつ、相抱あいだきて煙たどりて音もなく庭くだに下りぬ。女星の額の玉は紅くれない光を射、男星の水色の光を放てり。天津乙女あまつおとめは恋の香かに酔かいて力なく男星の肩よに依よれり。かくて二人ふたりは一山まの落ち葉燃え尽くるまで、つきぬ心を語りて黎明あけがた近ちかくなりて西の空遠く帰りぬ。その次の夜もまた詩人は積みし落ち葉の一つを燃やかしむれば、男星女星もまた空より下りくだりて

昨夜のごとく語りき。かくて土曜の夜まで、夜々詩人の庭より煙たち、夜ふくれば水色の光と紅の光と相並びてこの庭に下れど、詩人は少しもこれを知ることなし。

七つの落ち葉の山、六つまで焼きて土曜日むの夜はただ一つを余しぬ。この一つより立つ煙ほそぼそと天にのぼれば、淡紅色うすくないの霞かすみにつつまれて乙女おとめの星先に立ち静かに庭に下れり。詩人が庭のたき火も今夜をかぎりなれば残り惜しく二人は語り、さて帰るさ、庭の主あ人に一語の礼なくてあるべからずと、打ち連れて詩人の室しつに入れば、浮世のほかなる尊るじき顔の色のわかわかしく、罪なき眠りに入れる詩人が寝顔を二人はしばし見とれぬ。枕辺まくらべ近く取り乱しあるは国々の詩集なり。その一つ開きしままに置かれ、西詩せいし「わが心高こうげん原げんにあり」ちよう詩のところ出いでてその中の

『いざさらば雪ゆきを戴いたく高峰たかね』

なる一句赤すじき線すじひかれぬ。乙女の星はこれを見て早くも露の涙うかべ、年わかき君の心のけだかきことよと言いい、さて何事か詩人の耳に口寄せて私語ささやき、私語ささやきおわれれば恋人たち相顧あひまみて打ちえみつ、詩人の優ほおしき頬ほおにかわるがわる接吻くちづけして、安やすく眠りたまえと言いい出いで去りたり。

あくれば日曜日にちようびの朝、詩人は寝ねぎめの床に昨夜の夢を想おもい起おこしぬ。夢あまに天津あまつ乙女おとめの額ひたえ

くれなゐの星戴けるが現われて、言葉なく打ち招くままに誘われて丘にのぼれば、乙女は寄り  
 そいて私語くよう、君は恋を望みたもうか、はた自由を願いたもうかと問うに、自由の血  
 は恋、恋の翼は自由なれば、われその一を欠く事を願わずと答う、乙女ほほえみつ、され  
 ばまず君に見するものありと遠く西の空を指し、よく眼定めて見たまえと言いつてていず  
 こともなく消え失せたり。詩人はこの夢を思い起こすや、跳ね起きて東雲の空ようやく  
 白きに、独り家を出で丘に登りぬ。西の空うち見やれば二つの小さき星、ひくく地にたれ  
 て薄き光を放てり、しばらくして東の空金色に染まり、かの星の光自から消えて、地平  
 線の上に現われし連山の影黛のごとく峰々に戴く雪の色は夢よりも淡し、詩人が心は恍  
 惚の境に鎔け、その目には涙あふれぬ。これ壮年の者ならでは知らぬ涙にて、この涙の  
 む者は地上にて望むもかいなき自由にあこがる。しかるに壮年の人よりこの涙を誘うもの  
 のうちにても、天外にそびゆる高峰の雪の淡々しく恋の夢路を佛に写したらんごときに  
 若くものあらじ。

詩人は声はり上げて『わが心高原にあり』をうたい、『いざ去らば雪をいたたく高峰』  
 の句に至りて、その声ひときわ高く、その目は遠く連山の方を見やりて恋うるがごとく、  
 憤るがごとく、肩に垂るる黒髪風にゆらぎ昇る旭に全身かがやけば、蒼空をかざして

立てる彼が姿はさながら自由の化身とも見えにき。

(二十九年十一月作)



# 青空文庫情報

底本：「武蔵野」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年2月15日第1刷発行

1972（昭和47）年8月16日第37刷改版発行

2002（平成14）年4月5日第77刷発行

底本の親本：「武蔵野」民友社

1901（明治34）年3月

初出：「国民之友」

1896（明治29）年12月

入力：土屋隆

校正：蔣龍

2009年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

星  
国木田独歩

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>